令和6年度　学校関係者評価書

鈴鹿市立国府小学校

NO. 1

	本年度の活動(具体的な手立て)と指標	成果と課題	今後の改善点	学校関係者評価
学力向上×ICT活用	①4年生算数科でTT(または習熟度別少人数授業)による 一人ひとりに応じたきめ細かな授業展開 ②家庭学習充実に向けた自主学習プリントの実施 ③基礎学力向上のための基礎学力タイムの設定、学期末のまとめテスト分析 ④授業力向上のための定期的な授業参観(ぐるぐるウィー ク)、自主学習会の実施、全教員が指導細案を作成した授業の実施、市内外研究授業への参加 ⑤ICT(Chromebook)の活用法についての職員研修会の実施	①4年生の学校アンケートの「算数の授業で考えをもつことができた」の数値が向上した。1学期83%→2学期90%(7ポイント上昇) ②1日の平均家庭学習時間が、全ての学年で目標値を超え、平均時間が増加した学年が多かった。 1年　31.8分→33.7分(+1.9分)　2年　52.5分→56.8分(+4.3分) 3年　64.9分→67.3分(+2.4分)　4年　65.7分→62.6分(−3.1分) 5年　68.6分→73分(+4.4分)　6年　97分→92.5分(−4.5分) ③基礎学力タイムを継続的に取り組んできたこともあり、脳を活性化させてから授業に入るよう心掛けてきた。また、学期末のテストを各学年で分析を行い、児童の課題を共有して授業改善に生かすことができ、全国学調の結果国語・算数ともに県平均を上回り、基礎学力も高まってきた。課題としては、学習内容が多く、毎時間のタイムマネジメントや見通しをもった年間計画をしっかりたてていかなければいけない。 ④指導力を磨くということは教員としての職務であり、多忙による業務削減がうたわれている中でも指導細案を作成した授業を全教員が実施し、またそれをぐるぐるウィーク等で見合って交流できたことは、指導力向上に繋がった。また、月に1回ペースで実施してきた自主学習会では、「自主」ではあるものの、実際には出張や会議がない教員はほぼ全員が参加していた。 ⑤1学期にはCanvaやpadlet、夏季休業中にはオクリンクプラス、2学期にはスプレッドシートを用いた複線型授業展開についての自主学習会を実施し、ICTの効果的な活用法について深めることができた。また、ICT支援員と連携して、ICTを活用した授業の実践にも積極的に取り組んできた結果、児童の意識調査としては、学校アンケートの「パソコンを使った授業は楽しいですか」の数値が向上した。1学期94%→2学期96%(2ポイント上昇)	・ここ3年間の全国学調の結果から、本校の学力は着実に高まってきている。 また、「算数が好き」と回答した児童も増えてきている。 (67%→74%) ただ、「考えを伝え合うことができている」という項目に関しては否定的に 回答している児童数がやや(22%)多いため、基礎的な授業改善において、自分の考えを表現し、伝え合う場を設けていく。そして、これまでの取組の成果を生かしつつ、さらに質の高い授業作りに向けて研修を深めていく。 ・家庭学習の充実に関しては、児童の自主学習プリントの取り組み状況を見ていると、難しい問題や自分にとって課題である内容にチャレンジするのではなく、簡単にできる易しい問題のプリントを選んでいる姿も見られる。量的な向上だけでなく、質的な向上も目指して、よりよ い取り組み方について検討していきたい。	・ぐるぐるウィークや授業研修など教員の質を高める取り組みをしている。今後も、学力向上に努めていただきたい。 ・4年生の結果が7%アップしている。大きく伸びたといえる。嫌いにならないよう、今後も授業の工夫を進めていただきたい。 ・4年生は少人数指導を行った効果が出ている。学力と意欲が高まったといえる。 ・家庭学習の時間は増えているようだが、実際に質も高まっているのか、検証が必要か。 ・自主学習は、子ども達が苦手な問題を選択して取り組めるとよいか。問題を解いた足跡を残すような「過程を大切にする学習」を意識していくとよいか。 ・宿題の提出率は高まっている。先生が、休み時間に補習を行うなどフォローしている姿が見られる。 ・子ども達は、クロムブックを活用した授業や宿題に対して、意欲的に取り組む姿が見られるようなので、指導を継続していただきたい。
長期欠席対策	①不登校・不登校傾向の児童の把握し,校内での情報共有を 行い,支援体制を整える。 ②不登校児童理解シートや家庭訪問シートを活用し,どのような支援や対応を行っているのかを記録し,今後の支援に活かす。 ③保護者と密に連絡を取り,必要に応じてSC・SLSにつなげる。	・毎月の部会や職員会議での情報共有を行い,学期ごとに今後の対応について校内全体で検討することができた。 ・定期的な支援会議、担任による家庭訪問や電話連絡により、登校状況が改善した児童もいた。 SC・SLS等つながりをもつことができた。 ・登校しぶりがあった際,対応や支援をしてきたことによって、長欠が回避できた児童もいた。 ・長期休暇(夏休み)を境に2学期から学校に来れなくなったり、来にくい状況になる児童がいた。さらに保護者との連携を密にする必要がある。 ・学期が進むにつれて、支援の必要な児童が増え、登校支援に力を注ぐことが難しくなってきた。	・夏休み中に特に配慮や支援のいる児童の状況把握を定期的に行うようにし、2学期からのスムーズな登校へとつなげていくようにする。 ・別室登校の児童がおり、そちらに人的支援をとられることになり、登校支援がSLSさんのみになってしまった。登校支援のいる児童の状況把握を適宜行い、可能な範囲でCoがさらに動ける体制を整えていきたい。	・様々な家庭事情がある。担任の先生だけに負担が掛からないような、教員同士の協力体制を構築していただきたい。 ・特別支援教育コーディネーターを中心とした、支援体制を整えている。 ・教員同士で子ども達の情報共有が図られているので、大変素晴らしい。どの先生に尋ねても、皆が情報を把握できているように感じる。 ・本校では、学習の遅れが、行き渋りに影響する傾向が見られるため、基礎学力を高める取り組みも大切にしていきたい。
地域連携	①学校支援ボランティアの活動を地域コーディネーターと連携し、子どもたちの健やかな育成を図る。 ②学校運営協議会による熟議の充実と学校運営の改善に向けて協働して取り組む。 ③学校だより、ホームページで学校の取組を発進し情報共有を図る。 ④地域の方に協力をいただきながら、子どもたちの校外活動を充実したものにする。	・週2回算数で学習ボランティアに入っていただき、きめ細やかな支援をしていただいた。子どもたちもボランティアさんには安心してわからないことを聞くことができた。また、家庭科や図工にもたくさんの方にボランティアに入っていただき、担当教諭も授業をスムーズに進めることができた。 ・運営協議会主催の夏・冬休みの学習会にはたくさんの子どもたちが参加した。また運営委員会より呼びかけていただき、中・高生のボランティアの参加もあった。 ・地域の方のご協力でいろいろな体験を行うことができた。 ・学校だより平均月1回発行、ホームページへは週1回発信することができた。 ・ボランティアの人数を増やし、活動が負担にならないようにしていく。	今年度、学習ボランティアの担当を設けたり、見通しをもってお願いできるようにボランティアを頼んだ内容を表にして見える化を行った。引き続き、ボランティア活動が集中しないように、また突然ということ のないように、教員一人一人が把握して、ボランティア活動を効果的にお願いしていきたい。	・学校運営協議会の中核的な取組であるボランティア活動を、今後も継続していきたい。 ・ボランティアに携わっていただける方を募っていきたい。 ・本校はコミュニティスクールが機能している思う。学校運営協議会で、地域、PTA、学校が議論し進めていくことが大切。学校運営協議会がそのことを発信していきたい。 ・学校支援、学習ボランティアについての周知と啓発を進めていきたい。 ・冬の学習会を通して、学習習慣を取り戻す子達が多く、励みになった為、夏休み、冬休み後半に行っていることの意義を感じる。今後も、継続していきたい。

非認知能力育成	①自己肯定感を高めるための実践提案を行う。 ・自己肯定感を高めるための、グループ学習の際に使っていきたい言葉集の作成 ②自己肯定感を高めるための研修会の実施 ・家庭学習チェックシートの取り組み方をテーマにした、児童の「自己肯定感」を高めるための赤ペンコメントの入れ方や、「やりぬく力」を育てるための目標・計画の立てさせ方についての研修 ③児童の自己肯定感を高めるための授業づくりとしての研究授業の実施 ④郷土愛、自尊感情を高めるための郷土学習 ⑤地域・保護者への周知・啓蒙	①実践提案を各クラスなりにアレンジして取り組んだことにより、少しずつではあるが、児童の様子が明るくなるといった変化が見られた。学校アンケートの「自分にはよいところがあると思いますか」の数値が向上した。 1学期77%→2学期84%(7ポイント上昇) ・グループ学習で話し合うときに、言葉集をもとに互いを認め合う言葉をかけ合ってきたことで、周りの人から認められる、そして自分のよさにも気づくことができるようになってきた。 ・生活委員会を中心に、よいところに目を向ける取り組みを進めることができた。 例)ろうか歩きイイねキャンペーン、そうじのプロ計画 ・児童アンケート結果から、昨年度を比較し否定的回答割合が減少した項目がある。社会性に関わる項目では、「学校やクラスのルールやきまりを守ることができる」(4.8%減)、「何が良くて、何が悪いのか判断することができる」(10.2%減)の改善が見られた。自制心に関わる項目では、「誘惑に負けない」(7.1%減)で改善が見られた。わずかながら、否定的回答割合が増加した項目もあるため、引き続きの取り組みが必要である。 ②夏休みに三重大学の中西先生をお招きして、平中校区の先生方や津市新町小の先生にも参加していただき、児童に自己肯定感を高めさせるためのスキルが多くの教育関係者に広まった。 ・学校アンケートの「先生はあなたのよいところを認めてくれていると思いますか」の数値が向上した。1学期90%→2学期93%(3%上昇) ・家庭学習チェックシートに限らず、ノートやプリント等に対する教師の赤ペンコメントや前向きな声掛けを通して、児童の意欲を高めることを心掛けて取り組みにあたることができた。 ③自己肯定感を高めるための授業づくりの一環として、1Aで研究授業を行った。児童が互いに認め合う姿が見られ、授業者の声掛け等が参観者の授業改善につながり、よい研究授業となった。自己肯定感を高める授業の研究授業は、年度当初にはなく急遽決まったことで、よい機会ではあったが、特に授業者の負担が大きかったことは否めない。 ④国府ふるさとかるたを全クラス分作成して配付し、子どもたちが自分たちの国府地区の歴史や伝統について知ることができる、興味をもてる環境を整えることができた。 ⑤・図書館教育と連携した、非認知能力を高めるためおすすめ本の充実、保護者への紹介し、保護者にも呼び掛けていけたことはよかった。 ・子どもたちから募集した「魔法の言葉」を掲示し、学校を訪れた地域の方や保護者に見てもらうことができたのはよかった。	・お互いを認め合えるような言葉がけは、形式的なものでは意味をなさず、心から認め合えるようになるためには、「仲間づくり」が基盤となってくる。まずは友達を大切にできる、そして自分のことも大切にできる、してもらえるという関係性、温かい雰囲気の学級づくりを今後も目指していく。 ・学校では、テストの点数や運動の得意不得意など、集団生活ゆえに人と自分を比べてしまいやすい。だからこそ、しっかりとその子その子の成長や頑張りを見取り、一人ひとりの良さについて気付かせていけるような声掛けを今後も意識して児童と向き合っていくことを大切にしていきたい。 ・生活委員会の取り組みは、担当の裁量で決まる。来年度も「自己肯定感の涵養」を意識した取り組みができるよう引継ぎを行う。 ・自己肯定感を高める事業は、今年度のみであるが、事業を受けてできるようになったことや、推進するために提案したものは来年度も活用し、授業改善につなげていく。	・自己肯定感に係るアンケート結果が大きく上昇した。取組を続けることが大切。周囲からの言葉掛けを意識した結果ではないか。 ・人間は褒められると嬉しくなるもの。甘やかすのではなく、しっかり褒めていただきたい。子ども達が、ゆっくりと、相手のことを考えながら話すことができるよう指導していただきたい。 ・「魔法の言葉」が、どんどんと言えるようになると、人も学校も明るくなるのではないか。言葉づかいについて考えるきっかけにもなったのではないか。言葉遣いの大切さを今後も学んでいってほしい。 ・先生や保護者そして地域の人たちから褒められることや、ありがとうと言ってもらえることが、子ども達にとって一番の栄養になるのではないか。よい取り組みだったと感じる。 ・ろう下歩きいいねキャンペーンなど、子ども達が意欲的に活動し、良さを認め合う雰囲気を醸成できたことはよかった。 ・自己肯定感は自分では見つけにくいこと。多くの人と関わり、見つけてもらえる経験をたくさん積んでほしい。 ・挨拶をしたとき、返事が返ってこないこともあるが、子ども達の心の中に届いていると思って、声をかけ続けていきたい。 ・カルタ大会では、学力の低い子が輝いてる場面が見られた。授業以外のことにも積極的に取り組むことで、子ども達の様々な個性が見えるのがよいのではないか。 ・国府かるたのような取組を続けていくことで、地元の歴史や伝統を自慢できる子になってくれるのではないか。 ・読書に親しむ子どもが増えるように、保護者にも働きかけていただいた。家庭での読書が啓発されるよう取り組みを続けていただきたい。 ・お忙しい中、ホームページの更新を行っていただき、学校の様子を詳しく知ることができて有難い。下校時刻等の掲載もあり保護者は大変助かっている。